

特集 2030札幌冬季五輪 本誌保存版で 50年前の札幌

招致は是非か 振り返る 冬季五輪



半世紀前の北海道は、札幌冬季五輪（2月3日～13日）の開催で、雪をも溶かすような熱気に包まれていた。アジアにおける初の冬季五輪は、笠谷幸生の金メダルなど、感動と興奮を残し成功裏に幕を閉じたが、一方で巨費が投じられる金喰いイベントの側面もあることから、開催に批判的な声があったことも事実だ。

今回は本誌の保存版から五輪関連の話題を集めてみたが、当時の報道スタンスは、どちらかと言えば「アンチ五輪」寄りだったといえる。札幌市が本格的に2030年冬季五輪招致に向けて動き出したなか、改めて五輪開催の是非について考える機会となれば幸いである。
（フリーライター・内海達志）

ヒョウタンから駒の五輪

本誌がアンチ五輪に振れた論拠を示しているのが、1971（昭和46）年11月号の「時評 反オリンピックの目『オリンピックを成功させよう』とはなにか？」である。

IOCや組織委への嫌悪感が広がっている現在とは違い、世論もマスコミもほぼ祝賀ムード一色に染まるなか、少数派の代弁者として批判的な記事を載せた

のは、創刊からまだ6年、若い雑誌の気概ともいえよう。

〈冬季五輪を成功させるということは、強化合宿に励んだ選手が、一本でも多く日の丸の旗をあげることなのか、莫大な経費をかけた五輪施設の、完璧な運用が果たされることなのか〉（地元関係者も当初は、よもや札幌で冬季五輪が実現するとは、万に一つも考えて

いなかったようである。いふなれば、その方に一つのヒョウタンから駒が飛び出したのである。

IOCにとつての五輪の成功とは、とにかくカネを得ることであり、そのダーティーな部分は先の東京五輪で多くの国民が知るところとなった。膨張する予算に些かの痛痒も感じない、官僚的な組織委もまたしかり。多くの市民が五輪の意義を見い出せないのが現実だ。

「瓢箪から駒」であった半世紀前とは違い、今回は札幌が最有力候補地であるが、民意は反対多数でも政財界の賛成派にゴリ押しされるのでは、といった根強い不信感もまた、大

義なき冬季五輪の招致熱が高まらない要因であらう。

〈ことの外に驚き、かつ狂喜した地元の官民関係者は、以来口を開けば札幌五輪を強調し、「オリンピックを成功させよう」ムードを、いやが上にも盛り上げ、政治家は選挙に、経済人は企業利益に絡ませて奔走また奔走の日々となった〉

ご存知のとおり、五輪開催に合わせ、地下鉄と地下鉄、高速道路が整備され、札幌が政令指定都市の仲間入りする原動力となった。しかし、一方では「オリンピックを成功させよう」が一つの政治テーマとして利用され、為政者は札幌市民に五輪のエサをばらま

きながら国や道の予算を獲得し、街づくりを進めてきた〉という側面も否定できない。本誌はさらに〈為政者が常に忘れてならないものは、なにをやっ

ポスト五輪に残るもの

五輪といえば、どの開催地をみても、巨額なインフラ整備がセットになっていくが、各地で維持費ばかりがかかる「負の遺産」が増えている。

〈確かにオリンピックの施設づくりも公共投資に違いあるまいが、短時間の間に終わってしまう線香花火のような催しものに、これだけ人力、機械力、予算が投じられ、ごく一部がその恩恵にあずかる

という傾向は、やはりすんなりと納得がいかない〉（大阪エキスポの前列にみるまでもなく、あれだけ狂騒じみたお祭り騒ぎのあとにいったいなにが残ったかを振り返ってみれば、冬季五輪のあとにはなにが……の危惧を持たざるをえないのである。

直近の東京五輪の場合も、都が総額1400億円を投じて建設した6つの恒久競技施設



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)